

山梨県下の先土器時代資料の検討－1－

保坂康夫

1. はじめに
2. 資料の検討
3. おわりに

1. はじめに

山梨県内の先土器時代研究は、1953年の米倉山（こめくらやま）⁽¹⁾遺跡の発掘以来、30有余年の歴史をもつ。この間、50カ所ほどの遺跡が報告されているが、これらの報告をみると遺物の観察が不十分であったり、正確な実測図も不備で、遺跡の位置さえ明示されていないものが多い。これらの多くは表採資料であり、十分に注意して扱わねばならない性格のものであるにもかかわらず、慎重さに欠け、直感的な判断とも思える報告が目立つ。また、発掘資料は非常に少ないが、確実に先土器時代の生活面を調査し、十分な質と量の資料を得た調査は、天神堂遺跡、権現堂遺跡⁽²⁾、釈迦堂遺跡⁽³⁾、立石遺跡⁽⁴⁾、杯窪遺跡⁽⁵⁾、丘の公園14番ホール遺跡⁽⁶⁾、あげられる程度である。しかし、こうした遺跡も、十分な調査報告書が提示されたものはほとんどない。

こうした研究の現状から起る問題は非常に深刻なものがある。いうまでもなく、考古学は歴史叙述のための学問であるが、そのための確実な資料が十分提示できないのである。山梨県周辺の先土器時代遺跡の分布をみると、八ヶ岳山麓周辺の高原地域にあるいくつかの遺跡群、愛鷹山南麓・箱根山南西麓の遺跡群、相模野台地や武蔵野台地の遺跡群などがある。これらの遺跡群には石器材料の黒曜石や石器型式など同一のものがみられ、一つの大きな文化圏を形成している。当然、人間の行き来があったはずであるが、山梨県はこれらの遺跡群を結ぶ地域として重視されても着目されるべき位置にある。黒曜石採取の問題、これらの遺跡群の集団のあり方や生業等を論ずるにも着目されるべき地域と考える。

また、当博物館の活動に大きな障害となっている。いまだに、十分な資料提示、解説、遺跡分布図の提示さえできない状況にある。さらに、資料の不鮮明さから、県内研究者の中から先土器時代研究ばかりか先土器時代そのものに対する不当な評価さえ惹起している。こうした不当な評価は、先土器時代研究を行なおうとする意志さえ阻害している。新たな研究者がいっこうに現われないのである。

しかし、これまでの不鮮明な資料は、無視するにはあまりにも多いのである。しかも、1970年代末以来の大規模な開発事業に伴う発掘調査においても、数点の資料を表採同然のかたちで得たものがいくつかあるものの、十分な資料を得た発掘が少ない現状がある。また、大規模な遺跡分布調査がいくつか行なわれながら先土器時代遺跡の発見が少ないと鑑みると、今後飛躍的

な資料增加は悲観的な感さえある。

そこで、過去に報告された資料をもう一度ありうべき方法で客観的に提示したうえで評価し、現状における基礎資料を確保しておく必要がある。この作業の一環として、今回は山本寿々雄氏所蔵の資料の検討を行なった。

氏は、山梨県の先土器時代研究の先駆者である。岩宿遺跡が発掘されると、先土器時代遺跡の発見、発掘が相次いだが、その中で矢出川遺跡の調査がなされたことで、同じ八ヶ岳山麓の本県側にも遺跡があるのではないかと氏は考えた。野辺山原に隣接する高根町清里に遺跡を探したが発見できず、目を転じて八ヶ岳山麓から広がる韋崎泥流の存在する甲府盆地南縁の曾根丘陵上にも遺跡があるのではないかと考えた。こうして、米倉山遺跡を発見し発掘することとなる。以後、1966年の大月市宮谷遺跡や⁽⁸⁾ 1968年の豊富村浅利遺跡⁽⁹⁾ の発掘を手がけられた。また、都留文科大学考古学研究会を指導し、県内の先土器時代遺跡の分布調査を実施され、この成果の一部は1968年森本圭一氏によって公表されている。⁽¹⁰⁾ さらに、1970年の富沢町天神堂遺跡の発見・発掘も氏の努力によるものである。山梨県の先土器時代研究は、まさに氏の指導のもとに開始されたのである。

ここに提示する資料は、米倉山遺跡、浅利遺跡、鶴の島遺跡の発掘資料と、上石田遺跡、信州峠遺跡、込山遺跡付近の表採資料の30点である。

2. 資料の検討

(1) 東八代郡中道町米倉山遺跡の資料

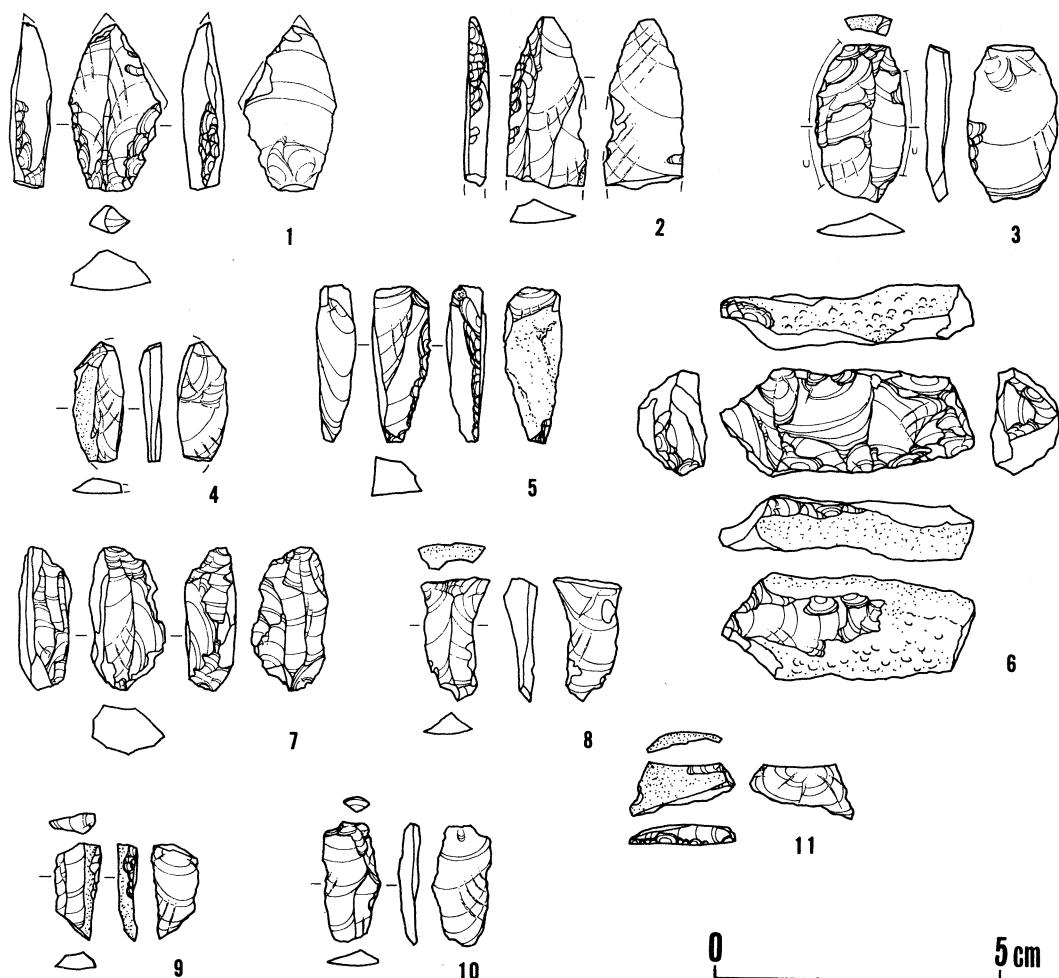
本遺跡は曾根丘陵上にある。洪積世の扇状地性砂礫層や湖成層、八ヶ岳起源の韋崎泥流などで構成される曾根層群、それをおおう厚いローム層によりなる。曾根丘陵の前・後面に大規模な断層がみられ、この運動により形成された丘陵である。ローム層は、Pm-1以後のものが一般的にみられる。本遺跡の所在する米倉山は、曾根丘陵前面に独立丘状に並ぶ丘陵の1つで、周辺の平坦面とくらべて高位にある。

1953年12月から翌年3月にかけ8本のトレンチを入れて調査したが、そのうちの1本から石器6点がローム層中より出土したという。土層は、第一層の黒褐色有機質土層、第二層のローム層、⁽¹¹⁾ 第三層の砂礫層である。ローム層は40cmの厚さであったという。

ここに報告する資料は、1955年に報告された発掘資料と、1966年に報告された表採資料である。発掘資料は、ナイフ形石器2点、使用痕ある剥片2点、剥片1点、石核1点である（第1図1～6）。

1は、基部調整の小型のナイフ形石器である。寸づまりで小型の縦長剥片を用い、打面を残して基部のみに荒い調整がなされている。素材の打面は調整打面である。先端部や刃部、打面の一部に新しい剥離の欠損がみられる。2は、部分調整のナイフ形石器である。打面側を先端にし、

打面部を細かな調整で除去している。下半部は欠損しているが、欠損の剥離面は古い。素材は、1と異なり長い石刃であったと思われる。3は、使用痕ある剥片である。両縁部に連続した微小剥離がみられる。背面は打面側からの剥離のみみられる。打面には自然面が残るが、打面調整や頭部調整もみられる。4の剥片は、打面を含む右側縁側半分を大きく欠損している。欠損の剥離面は古い。背面には打面側からの大きな剥離がみられる。打面には背面の剥離を打面とする小剥離があるが、背面との角度が鈍角であり、打面を形成するような性格のものではない。5は、使用痕ある剥片である。正面の使用痕の小剥離群に切られる大きな剥離は、この剥片の主剥離面である。この他の剥離は、いずれも風化の度合いが弱い。裏面の打面側からの小剥離、正面の打面側からの剥離、左側の折れ風の剥離で、いずれも相互に風化の度合いが違い、この順で弱い。6は、石核である。細長い黒曜石原石を横に使っている。自然面を打面として、明確な打面調整はない。剥離作業は主に正面で行なわれ、上下両方向から、小型の横長剥片を剥離したものと思われる。右側面や背面にも剥離作業がなされた形跡がある。左側面の大きな剥離は、折れによるもの



第1図 米倉山遺跡の資料

と思われる。打面の頭部などに潰れによる小剥離が多くみられ、おそらく台石を用いて剥離を行なったものと思われる。剥離面の風化が他の資料より弱い。

上記の石器のうち、1・2は先土器時代のものと思われる。3についても、大きさや剥離技術、風化の度合いなど、1と共に通する点が多く、前者に加えるべきかもしれない。4～6については、技術的な面や風化の度合いなどから、前3者と同様に扱うのには難点があろう。6の石核については、石鏃素材の石核とみることも可能かもしれない。これらの出土したローム層は、本地域が曾根丘陵の最高位面であり、少なくともPm-1以上のローム層の堆積はあったであろうと考えると、厚さ40cmで直接砂礫層に乗る状況からして、縄文時代のものも含む二次堆積土層であることも想起できる。早急に結論をくだすことは危険があろう。なお、資料は全て黒曜石。

7から11は、1966年に細石刃や細石核として報告された表採資料である。7は細石核とされたものであるが、打面がなく、上下両方向からの剥離がみられ、両端に破碎痕がある。上下両方向からの剥離で、切り合ひ関係が不明で、同時に剥離したと思われるような剥離もみられる。いわゆる楔形石器と思われる。8の剥片は自然面を打面とする。打面部が他の部分より幅広く、肥厚している。9も8と同様な特徴がある。打面の剥離はポジティブバルブを残す。10の剥片は打面調整や頭部調整風の剥離がみられる。背面の剥離は末端まで剥離していないものや、かなり幅広の剥離であり、細石刃を剥離した形跡はない。11は、横長剥片である。9と11に使用痕らしき小剥離がみられる。

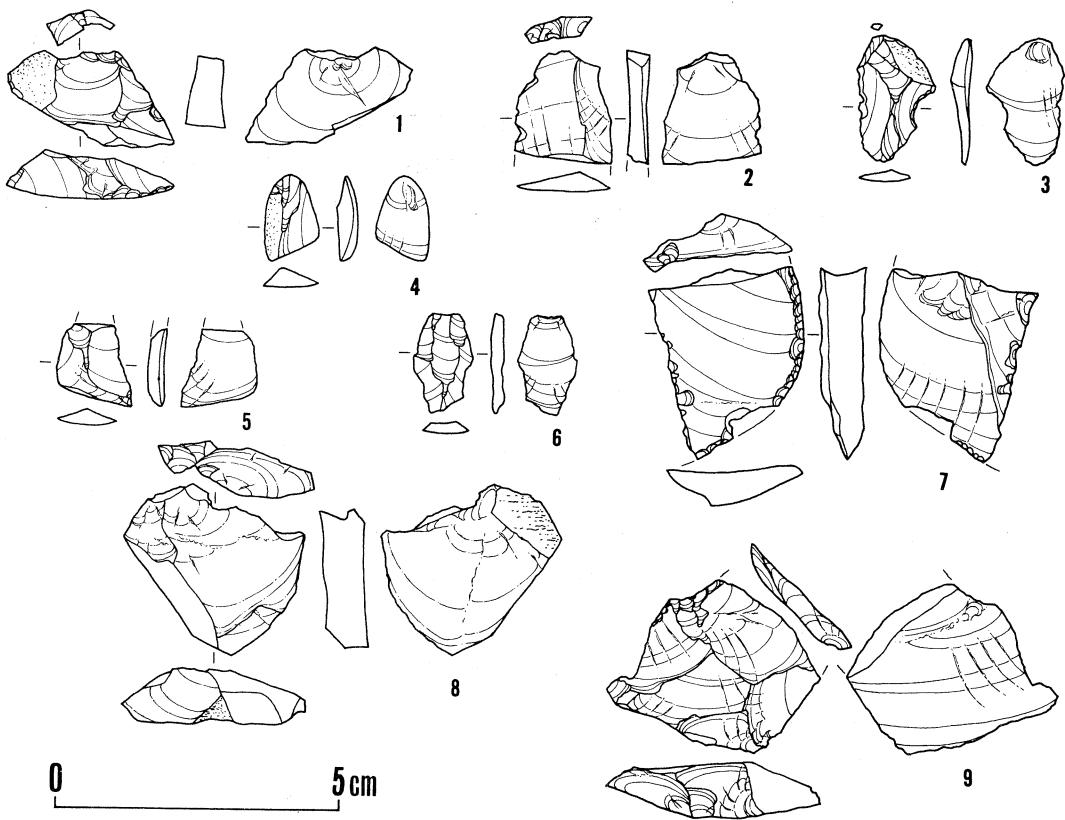
細石刃は、幅がおよそ1cm以内で長さが幅の2倍以上のものというのが一般的な定義である。その他、幅の狭い同方向の剥離が連続する背面、微小な打面、厚さが均一で薄く、両側縁が直線的で平行しているなどの特徴がある。8から10では、打面部が大きくまた肥厚し、厚みがあり、背面にみられる剥離は幅広で、両側縁がふぞろいである。また、7は、風化の度合いが強いものの、縄文時代にも広くみられる器種である。11の横長剥片も含め、上記の資料だけで細石刃文化の存在を考えるにはやや危険があると思われる。なお、上記の資料はいずれも黒曜石製である。

(2) 東八代郡豊富村浅利遺跡の資料

本遺跡は曾根丘陵上にあり、米倉山の西方にある曾根丘陵前面の平坦面上にある。1956年に「チョツパー又はそれに類する石核」が3点出土したことから発掘が計画され、1968年12月14日から4日間、8m×4mのトレーニチ1本を設定して発掘が行なわれた。その結果、先述と同様な石器3点がまとめて出土し、その他ナイフ形石器を含む剥片が得られたと報告されている。土層は、I層が耕作土で、有機質混りの黒色をおびている褐色土層、II層が黒味の少ない層、III層が軟質ロームで、II層下部に縄文土器片、III層上部10～18cmにかけて石器の出土がみられたと⁽¹⁴⁾いう。

ここに報告する資料は、発掘資料の一部であり、他は地元にあることである。剥片8点、削器1点である(第2図)。

1は、横長剥片である。打面の剥離は大きい。背面では打面側からの剥離のみみられる。下面には、本剥片剥離以前の、左右両側縁側からの剥離がみられる。一部に使用痕もある。2の剥片は、打面部に細部調整風の剥離がみられる。しかし、この剥離は左側縁側にもまわり込んでおり、打面が平坦でなかったことを窺わせる。背面には、上下両方向からの大規模な剥離がみられる。剥離面の風化が非常に弱い。3の剥片は、背面に左右両側縁方向からの剥離がみられる。打面は小さい剥離面である。4は碎片である。打面は破碎している。背面の左半分は自然面、右半分は右側縁側からの剥離面である。5の剥片は、打面を欠損する。背面には、打面側からの剥離のみみられる。中央の小剥離は欠損時のものである。6の剥片は、打面部が破碎している。背面には、打面側からの剥離のみみられる。7は、削器である。打面部と左側縁側を大きく欠損する。欠損面は古い。右側縁に連続する小規模な剥離があり、刃部を形成している。背面には、打面側からの1枚の大きな剥離面があるのである。風化の度合いが他より強い。9と同一個体と思われる。8は、チャートの剥片である。打面には、背面の剥離を切って、大きく抉るような剥離がある。背面には、左側縁方向からの大きな剥離のみみられ、その打点部分に破碎痕がある。下縁部には、背面剥離以前で、背面を打面とする大きな剥離があるのである。腹面の主剥離面は、バルブの高まりがなく平坦である。打点部は破碎している。打面に節理面を残すが、主剥離面との角度は 180° に近く、打点部の破碎と同時に剥離したものと思われる。9の剥片は、打面側を大きく欠損する。欠損面



第2図 浅利遺跡の資料

は古い。欠損部の剥離は彫器風であるが、2枚の剥離があり、いずれも背面側に打点があることから、背面を何かに打ちつけて折った跡と考えた。背面の剥離は多方向である。下縁部には主剥離面を打面とする剥離がみられるが、二次加工といえるほど執拗ではない。左側縁上部に若干の二次加工がある。これらの資料は、8のチャート以外全て黒曜石である。

これらの資料は、横長・縦長の剥片を含み、背面の剥離の方向や大きさ、打面の剥離のあり方など相互に違いがみられる。それぞれ違った剥離技術により得られたものか、あるいは統一性のない剥離技術によって得られたものと思われる。7と9については、風化の度合いが強く、大型であり、他と区別する必要があるが、先土器時代に限定するにはやや難点があろう。定形的な石器は7の削器があるが、他にチヨッパー風の石器6点が報告されている。今回は報告できなかつたが、写真から判断するかぎりでは、黒曜石原石かその荒割りとも思える。一ヵ所からまとまって出土した状況も考えると、縄文時代に多い石器原材のデポであるかもしれない。しかし、小範囲の発掘でもあり、これらの資料から早急に結論するのは危険と思われる。

(3) 南都留郡河口湖町鵜の島遺跡の資料

鵜の島遺跡は、河口湖の中にある鵜の島にある遺跡である。1969年に発掘され、縄文早期から弥生時代の土器片が発見されたが、最近発刊された概説書の中で、先土器時代遺物があること⁽¹⁵⁾が述べられている。今回報告する資料がそれである(第3図)。

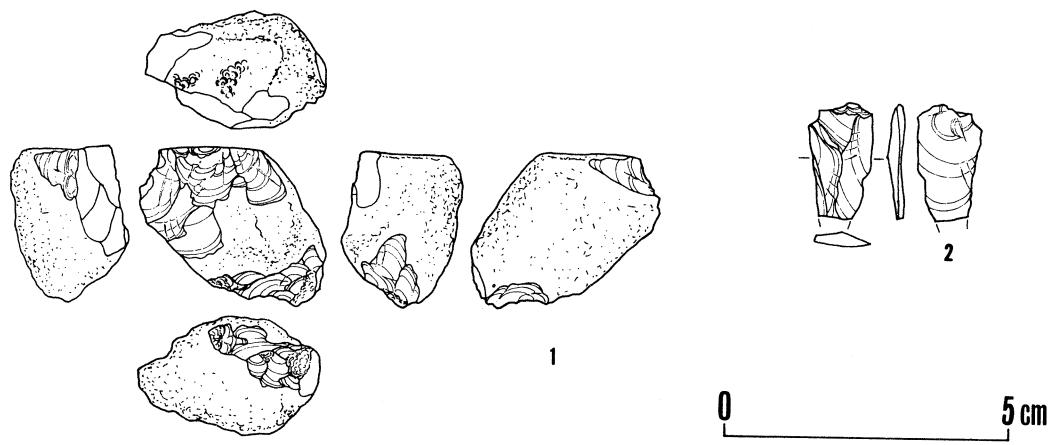
1は、正面に2・3の剥片剥離の跡がみられるものの、全体に破碎痕が目立つ。上面の平坦な自然面には打撃痕が顕著である。おそらく、台石を用いて黒曜石原石を打撃し、剥片を得ようとしたものと思われる。2の剥片は、打面部が破碎して存在しない。左右両側縁側からの剥離がみられる。発掘面積も少なく、これらの資料だけから先土器時代遺跡の存在を考えるにはかなり危険性があると思われる。

(4) 甲府市上石田遺跡の資料

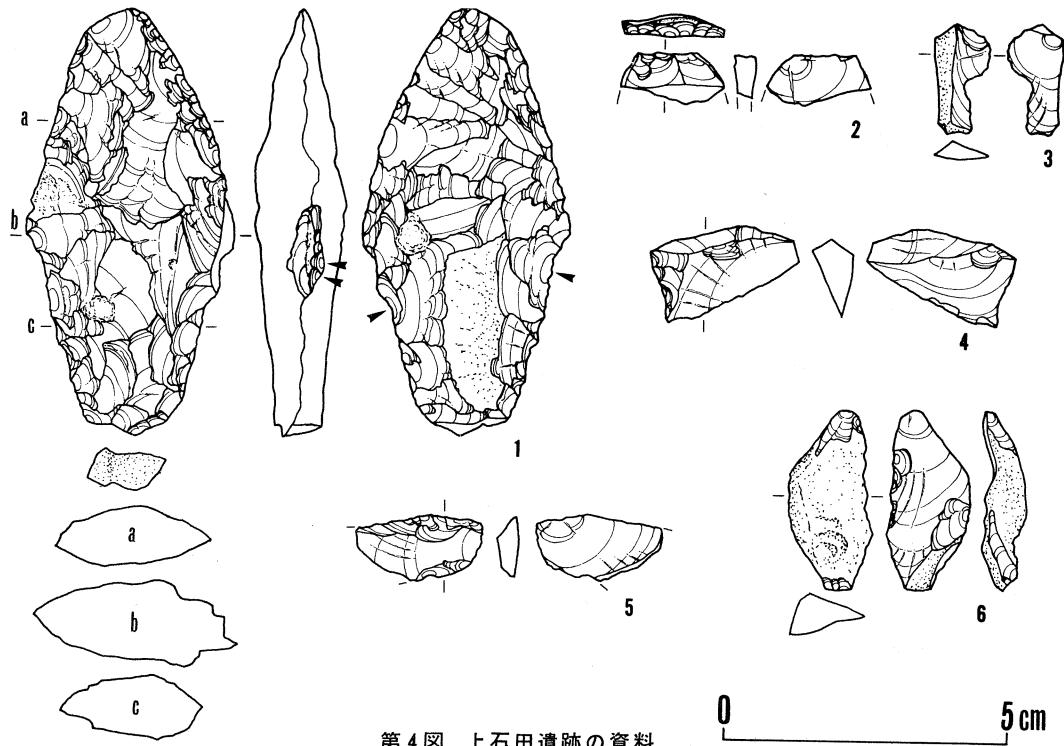
本資料は、1969年の甲府市の土地区画整理事業の工事の際に発見されたものである。同じ場所から、縄文時代中期の土器片や石臼⁽¹⁶⁾も発見されている。本遺跡は、釜無川扇状地上に位置する。高木勇夫・中山正民の両氏は、1983年に甲府盆地西部地域の地形について論じているが、この中で釜無川扇状地について、「その北半部においては御射使川の強い勢によって釜無川が盆地内沖積低地に流入し、おもに河床に堆積した流路堆積物によって形成されたもの」であるとした。⁽¹⁷⁾これにしたがえば、本遺跡は沖積地に立地することになる。

今回報告する資料は、1970年に報告された資料である。石槍1点、剥片5点である(第4図)。

1は石槍である。両縁部中央が突出し、先端は丸く、基部端は自然面が残され平坦である。両面のほぼ全面に調整がみられるが、そのあり方で3つの部分に分けられる。1つは突出部から先端に至る部分の先端側半分である。器体中央に至る平坦で大きな剥離で丁寧に調整され、断面a



第3図 鶴の島遺跡の資料



第4図 上石田遺跡の資料

にみるように他の部分より薄く仕上げられている。突出部側半分では、非常に荒い調整がみられる。剥離は大きいが、断面bにみるようにいずれも階段状に波うっている。コブ状の高まりを除去し、薄くしようとした意図の剥離と思われ、先端部側半分と同様に仕上げられるべき部分であったのだろう。突出部より下方の基部の調整は、前2者とは大きく異なる。断面cにみるように、剥離が前者にくらべて小さく、角度が急である。中央部には、自然面や素材の剥離面が大きく残存する。先端部と基部とを意図的に別々の調整技術で作り出しているものと思われる。先端部の両縁がなす角度は、基部の両縁がなす角度より大きく、両者の接する部分には必然的に稜が形成

される。また、突出部の基部側に抉るような剥離がみられる（矢印）。これらの剥離は、他にくらべて急角度で、縁辺に対して 90° 近い。したがって、中央部に逆東状の突出部を作り出そうとしたことは十分考えられる。山本氏や石黒氏の報告では新潟県中林遺跡の石器に対比しているが、こうした形態や製作技術は、さらに新しい時期の石槍や石鎌などに近いと思える。類似例は、近くでは長野県和田遺跡などがあげられる。⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾

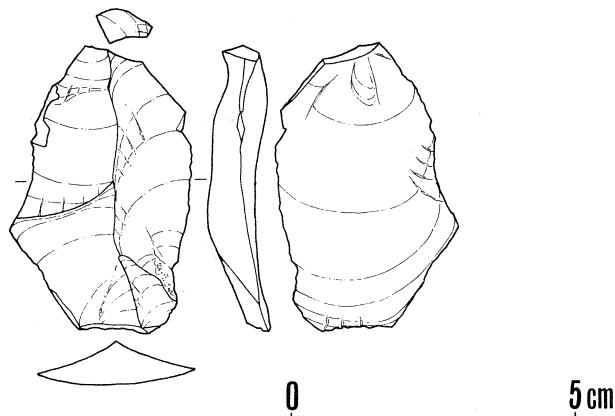
2は剥片の打面部である。打面細部調整風の剥離がみられるが、両側縁側に広がり、さらに自然面が残存する。背面には打面側からの剥離のみみられる。3の剥片は、打面が破碎している。背面には打面側からの剥離のみみられる。4の剥片は、左側縁部に若干の二次加工がみられる。打面部、背面には多方向からの剥離がみられる。5の剥片は、打面が破碎している。背面には、打面側からの小剥離と右側縁方向からの大きな剥離がある。剥片剥離後的小剥離がいくつかあるが、二次加工と言えるほど執拗ではない。6の剥片は、上下両端部に破碎痕がある。台石を用いた剥離技法で得られた剥片と思われる。これらの石器は、全て黒曜石であり、風化の度合いはいずれも弱い。

これらの剥片は、背面の剥離の方向や大きさ、打面の剥離のあり方など相互に違い、まったく異った技術、あるいは統一性のない1つの剥離技術によるものと思われる。風化が弱い点や遺跡の立地も考えると、先土器時代のものと考えるにはやや難点があろう。

(5) 北巨摩郡須玉町信州峠表採の資料

信州峠は、秩父山塊西端の山梨と長野の県境の峠である。馬場平遺跡などの先土器時代遺跡群のある長野県川上村が眼下にある。1974年、道路拡張工事の際に剥片が何点か表採され、最近発行された概説書の中で、ポイントや石刃が存在していることが報じられている。ここに報告する資料は、表採された資料のうちの1点である（第5図）。

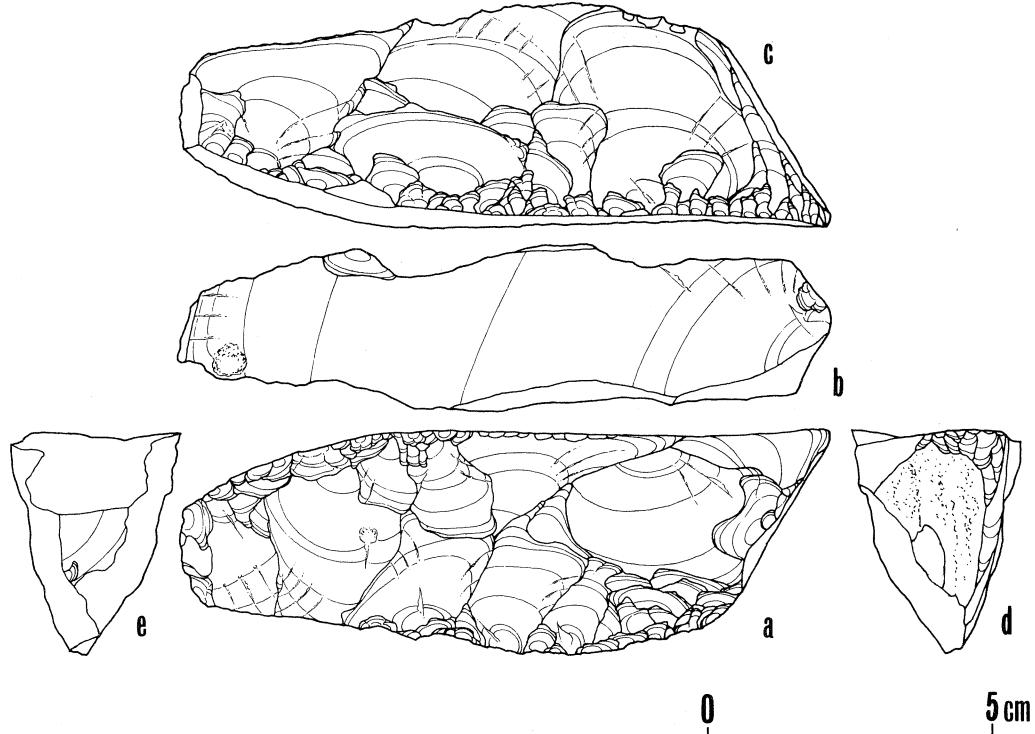
第5図は、チャートの縦長剥片である。打面は比較的大きな剥離の調整打面である。右肩部の剥離は、非常に大きな剥離面か節理面である。背面には、上下両方向からの剥離がみられる。両設打面の石刃技法により剥離された剥片である可能性がある。この他、水晶やメノーの原石、剥片・碎片など数点が表採されている。定形的な石器がないので即断はできないが、川上村の遺跡群の広がりを考えるうえで考慮すべき資料であろう。



第5図 信州峠表採資料

(6) 東山梨郡牧丘町込山遺跡付近での表採資料

東山梨郡牧丘町豊原にある込山遺跡付近で1975年に表採された資料である。この地域は段丘がよく発達し、ローム層の堆積も厚く、多摩ロームに対比されるものから、Pm-1以後のローム層まで存在する。⁽²²⁾ 表採地点は、最高位の倉科おし出し面の頂点近くに位置し、かなり傾斜しているが、ローム層はよく発達している。⁽²³⁾ なお、込山遺跡は縄文時代中期末から後期初頭の土器片を出土する遺跡である。⁽²⁴⁾ 本資料は、今回初めて報告するものである。



第6図　込山遺跡付近表採資料

第6図は、舟底形細石核のブランクと思われる。大きな非調整のネガティブな剥離面と上下両方向から大小の連続的な剥離面2面により、断面三角形で全体にいわゆる舟底形の形態を呈する。d面には大きく自然面が残るが、b面との角度が鋭角で、あたかも舟の舳先のような形状を呈す。a面の剥離は、b面側と下縁側より剥離された連続的な小規模剥離群と、同方向の大規模剥離群よりなる。小規模のものより大規模のものの方が古いが、いずれもb面より新しい。c面では、b面縁部全体にみられる小剥離群と、b面側からの大規模剥離群よりなる。大規模剥離群は、a面の大規模剥離群の一つを切るが、大半はa面の下縁側からの小規模剥離に切られている。c面の剥離群は、d面の自然面にまでまわり込む。この中に長いものも1枚みられるが、打面部側で幅がかなりあると思われ、細石刃とは思われない。b面は、ネガティブな剥離面である。バルブは、a面下縁部からの古い大規模剥離によって一部が取られている。e面は、b面に切られる

唯一の剥離面である。b面が非常に広い剥離面と思われること、a・c面にみられる素材の幅を減じる剥離作業が相当な量行なわれていると思われること、b面とその打面のa面との角度がかなり鋭角なことから、素材は大型剥片を剥離した核の側であると思われる。素材剥離以前の調整状況が不明であるが、いわゆるホロカ技法による細石刃核ブランクと理解したい。

本資料のように北日本に類例がもとめられるものは、近くでは長野県野辺山原の柏垂遺跡、東京都瑞穂町狹山遺跡B地点などがあり、静岡県芝川町駿河小塚遺跡も同様なものとする考え方もある。⁽²⁵⁾
 (26)
 (27)
 (28) 舟底形細石刃核の遺跡が牧丘段丘上にあっても、決して不思議ではない。また、石材の黒曜石についても、和田峠の諏訪側鉱脈のものであるとの御教示を森山公一氏より得た。

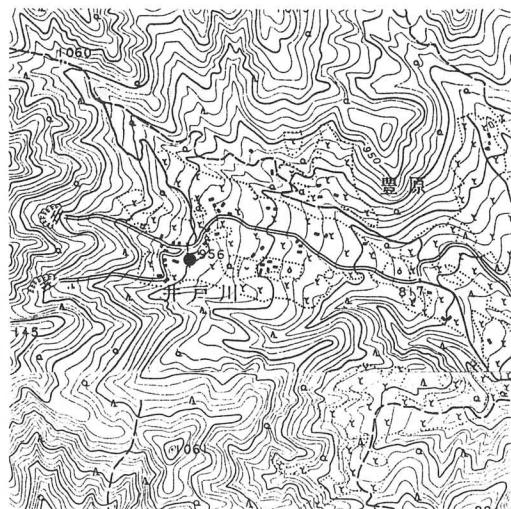
3. おわりに

今回報告した資料から、早急に結論をくだすのは危険であり、今後も十分な注意が必要と思われる。しかし、米倉山遺跡のナイフ形石器、込山遺跡付近表採の舟底形細石刃核ブランクが確認できたことの意義は非常に大きいと考える。米倉山遺跡のナイフ形石器のうち基部調整のものは、釧路堂遺跡や天神堂遺跡の中には見い出されていない。別時期あるいは別集団の所産と見るべきものかもしれない。また、込山遺跡付近表採の資料は、いまのところ県内唯一の細石刃文化の遺物と思われる。しかも、中部地方南部には稀な舟底形細石刃核である。今後、当該期の研究に重要な資料となろう。

最後に、このような至らない報告にもかかわらず、快く資料を提供して下さった山本寿々雄先生に衷心より御礼申し上げる次第である。



第7図 米倉山遺跡位置図



第8図 込山遺跡付近表採地点位置図
(いすれも 25000 分の 1)

註

- 1 山本寿々雄 1955 「山梨県下に於ける無土器文化の調査（予報）—米倉山の例—」『石器時代』第一号
- 2 富沢町教育委員会 1971 『天神堂遺跡発掘調査報告書（旧石器時代）』伊藤恒彦 1979 「天神堂石器群の再検討」『甲斐考古』16の2
- 3 小林広和、藤本丑雄、里村晃一 1976 「山梨県権現堂石器文化の調査（第1次）」『信濃』第28巻第4号
- 4 保坂康夫 1985 「山梨県の先土器時代遺跡」『歴史手帖』第13巻1号
- 5 山梨県立考古博物館 1982 『展示概説』
- 6 小林広和、上杉陽、里村晃一 1982 「桂川支流菅野川杯窪で発見された旧石器とその火山灰層序」『日本第四紀学会講演要旨集』12
- 7 山梨県教育委員会 1985 『丘の公園14番ホール遺跡範囲確認調査報告書』
- 8 山梨県教育委員会 1966 『中央自動車道東京・富士吉田線の新設に伴う発掘調査報告書（概報）』
- 9 山本寿々雄 1969 「東八代郡豊富村浅利宮の下A地点1区出土の石器について（略報）」『甲斐考古』6の2
- 10 森本圭一 1968 「山梨県内出土の石器について（先土器～縄文文化発生期）—表採一」『甲斐考古』5の4
- 11 山梨県地質図編纂委員 1970 『山梨県地質誌』
- 12 註1に同じ
- 13 谷口一夫、川崎昌宏 1966 「山梨県米倉山出土の細石核と細石器」『甲斐考古』1
- 14 註9に同じ
- 15 山本寿々雄 1984 『日本の古代遺跡14 山梨』 P.62
- 16 石黒良行 1970 「甲府盆地底部出土のポイントについて」『甲斐考古』7の1
山本寿々雄 1970 「甲府盆地底部出土の旧石器文化ならびに縄文文化中期の遺跡について」『甲斐考古』7-3
- 17 高木勇夫、中山正民 1983 「甲府盆地西部地域の地形」『日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要』 P.36
- 18 註16に同じ
- 19 鈴木道之助 1981 『図録 石器の基礎知識Ⅲ 縄文』 P.55
- 20 茅野市教育委員会 1976 『尖石考古館図録』 P.142
- 21 註15に同じ

- 22 甲府盆地第四紀研究グループ 1969 「甲府盆地の第四系」地学団体研究会専報15号『日本の第四系』P P. 254 ~257
- 23 手塚光彰、大村昭三、小笠原幸夫、佐野昭男 1984 「牧丘段丘の地形と地質」『山梨の自然をめぐって』
- 24 信藤祐仁氏の御教示による。
- 25 川上村教育委員会 1984 『川上村遺跡詳細分布調査報告書』 P. 86
- 26 瑞穂町教育委員会 1970 『狭山・六道山・浅間谷遺跡』 P. 39
- 27 芝川町教育委員会 1972 『駿河小塚—静岡県における先土器文化の研究一』P P. 29~31
- 28 鶴丸俊明 1979 「北海道地方の細石刃文化」『駿台史学』第47号PP.37~38